2019年度設置研究所から

様式pro_8_1

2019年度プロジェクト研究所業績報告書(中間報告)

PJ No.	PJ-			
研究プロジェクトの名称	まちの居場所づくりプロジェクト			
研究所の名称	実践女子大学　まちの居場所　研究所			
研究所所長	所属　現代生活学科　職名　教授 氏名　須賀　由紀子　㊞			
研究員	所　属	職　名	氏　名	
	生活環境学科	教授	橘　弘志	
	生活文化学科	准教授	井口　眞美	
	生活文化学科	専任講師	大澤　朋子	

＜研究業績報告書＞

今年度の研究計画の概要
1.基礎調査 A)日野市内で「まちの居場所」となりうる場所の調査を、日野市と協働で行う。また、地域づくりに関わる人的資源や、地域文脈（日野市の歴史・地形・自然資源・地域特性など）の把握を行う。 B)「まちの居場所づくり」の先進事例の調査を行い、「まちの居場所」の意義と可能性、持続的展開の課題について検討する。 ※調査地の候補として、長野（まちの縁側プロジェクト）、京都（立命館大学）、大阪（近畿大学）、佐賀（佐賀大学）、石川（佛子園）等を予定。 **2.「まちの居場所づくり」実践研究に向けての準備** これまで培ってきている地域交流プログラムの実施を重ね、市民との関係を形成する。

今年度の研究実績
1.の基礎調査について A）日野市における「居場所づくり」の基礎調査として、以下の内容を行った。 ①地域の人々の居場所としての活用が期待される「地区センター」６６カ所について、日野市地域協働課との連携のもと、橘ゼミ学生が、市内すべての地区センターに予約をとり、現地に足を運び、「概観」「間取り」「内観」等現地調査を行い、その特性を把握した。 ⇒把握した内容と日野市所蔵の間取り図をまとめて「地区センター図鑑」として冊子化（『女子大生が全部回った　地区センター図鑑』2019 年 3 月発行）し、地区センターを「まちの居場所」として多様に活用していくための基礎資料とした。 ⇒本資料については、日野市地域協働課と共有し、市民の居場所づくりに役立てる。 ②日野市の昭和の暮らしの風景写真を用いた日野の地域特性調査 日野市日野図書館「まちかど写真館」所蔵の昭和時代の日野の風景写真を使い、市民に日野市の暮らしの思い出を語ってもらうワークショップを実施し、日野市の地域特性、市民特性を把握した。 ③中央公民館における地域活動収集 「第２次日野市公民館基本構想・基本計画策定委員会」の委員に、須賀ゼミ学生が「日野市教育長が認める者」として加わり、会議に出席する中で、日野市社会教育の動向と居場所づくりについて把握した。 （良好な関係を築き、大学の社会連携へ寄与した） ④日野市の空き家対策に関する情報収集 日野市都市計画課とコンタクトをとり、日野市の空き家の現状とその対策について情報交換の研究会を行った。大学周辺の空き家の状況、活用のあり方などについての意見交換を行った他、日野市が実施を予定している、空き家活用・維持のノウハウを学ぶ「空き家の学校」のプログラムについての意見交流を行った。 ⑤日野市内のコミュニティカフェやふれあいサロン等、高齢者サロンに関する情報収集 地域包括支援センターが地域共生社会づくりに向けて開催を始めているコミュニティイベントや、日野市高齢福祉課が推進するふれあいサロンの活動への参与観察を行った。 （日野市地域包括支援センターすてっぷ「すてっぷフェス」、同多摩川苑「たまカフェ」／高齢者サロン「さざんかの会」「ひだまりサロン」「市民サロン・シモン」「黒川かわせみサロン」「もぐさオレンジカフェ」地域のたまり場ふれあいサロン「明星地区つながりの家アムール」） Ｂ）先進事例調査として、以下の施設の運営の実際について視察を行った。 ①コミュニティハウス「芝の家」（港区） 空き家となった古民家を活用し、行政と大学と市民とが連携して運営を行う居場所づくりの草分け的存在の「芝の家」の活用の実際についての視察を行った。

②地域共生型施設「またあした」（武蔵小金井市）

通常の施設では通所が困難な高齢者と乳幼児保育を融合し、多世代のみならず、多様な人々が共に過ごし、育ちあえる場づくりを、空き家となったアパートを改築して行う地域共生型施設「またあした」を視察し、運営の理念や運営状況、地域の中の存在価値などについてのインタビューを行った。

③地域共生型施設「佛子園」（石川）

社会福祉法人として、多様な人々が共に共生しあえる場づくりを行い、福祉を要に地域づくりを展開している「佛子園」系列施設を視察し、運営の理念や運営状況、人材育成のしくみなどについてのインタビューを行った。

2.「まちの居場所づくり」の実践研究の準備状況

Ａ都市と農村を結んで構想する居場所づくり

・新潟県十日町市布川地区との地域連携活動を継続し、日野市民とのつながりのパイプづくりを行った。（田植え、夏祭り、稲刈りなどに、日野市民と学生が一緒に参加をし、関係づくりを行う）

・日野市カワセミハウス「オクトーバーフェスト」の実施

都市農村交流による居場所づくりの拠点と考えている日野市カワセミハウスで、年に一度行われる地域交流イベント「オクトーバーフェスト」の企画・実施を学生が中核となって行った。この中で、十日町市布川地区と日野市豊田地区との交流を反映したプログラムを実施し、次年度への流れを形成した。

・日野市民の方および学生とともに現地を訪れて活動報告会を行い、都市農村交流促進による関係人口づくりという社会課題の問題意識を地元の方と話し合い、今後の活動展開の考え方を共有した。

・今後の交流を円滑にすすめるためのコミュニケーションツールとして、農村を都市民にとっての居場所として両者の関係を深めることに気づきをもたらすリーフレットの作成を行った。

Ｂ「子ども放課後プログラム」の開発

・日野市南平地区の住民、地区社協が新川辺地区センターで定期開催する子どもの居場所づくりの取り組み「希望のとびら」に学生とともに参加した。活動停滞期に学生が主体的に課題を見つけ、プログラム変更の提案をして活性化を図った。2020 年度は、COVID-19 の状況を見つつ、参加者を集め活動を再開することが主催側との話し合いで決定している。

・キャンパス近隣の地区センターを活動した放課後支援プログラム開発のため、複数の地区センターの実地調査を行った。次年度からは神明地区センターを活用し、しんめい児童館との共同プログラムに学生が定期的に参加する計画である。

現在までの進捗状況
１．事業計画の進捗度について（①～④のいずれかを選択してください） ①順調である　②おおむね順調である　③やや遅れている　④遅れている

※上記の進捗度を示す事由を記載のこと。「やや遅れている」「遅れている」とした場合は、改善点を記載。（計画の見直しが必要な場合はその内容も記載すること）

【事由】

・2019 年度に予定していた日野市内の居場所に関する基礎調査はおおむね実行することができ、各関係機関との関係づくりは順調に行うことができた。しかしながら、本プロジェクトの「まちの居場所づくり」実践研究を行う特定の拠点を定めるまでに至ることができなかった。

・理由として、①本プロジェクトの実践研究の居場所づくりの拠点にすることを想定した大学近隣の空き家物件について、条件等折り合いがつかず、目途がたたなかったこと、②年度末の２月～３月にかけて、新型コロナ感染症拡大の影響を受けてしまい、子どもを対象とする地域の居場所づくりのための活動を実施することができなかった。活動の中で実践研究のフィールドを獲得する予定であったが、それができなかった。

・一方、都市農村交流をテーマとする計画は、日野市カワセミハウスを活動拠点として、おおむね予定どおり実施することができた。

【計画見直しについて】

・新型コロナ感染症拡大に伴う社会情勢の急変に伴い、「人が集まる」こと自体に制限がかかるという想定外の状況が生じてしまった。この状態がどの程度長引くのか、人が集まる活動がどのように開放されていくのか、不透明な状況である。2019 年度に作成した冊子「地区センター図鑑」をもとに展開を想定していた、地区センターを活用した居場所づくりに関する日野市側の施策も取りやめとなってしまっている。

・今後の社会情勢次第であるが、2020 年度計画としていた「まちの居場所づくり」の実践研究および「まちの居場所」の効果に関する予備調査を行うことは、極めて難しいことが予想される。学生の学外活動に関しても制限が予想される。このような中で研究を遂行することは困難であるため、実践研究は、2021 年度に行うことに移管し、2020 年度は、2019 年度末に行うことができなかった子どもの居場所づくりに関する小規模の活動、および、ここまでの活動の中で当プロジェクトの居場所づくりの一つのハブとなっている日野市カワセミハウス（または日野市中央公民館）を主たる拠点として、地域の多世代がコミュニケーションをはかる空間づくりや小規模な地域交流活動等を工夫して行い、地域の居場所づくりのハード・ソフトの開発を重ね、実践研究を行う拠点を検討するなど、2021 年度の実践的な研究につなぐ。

・都市農村交流をテーマとする取り組みに関しても、人的交流が制限される中、当初計画どおりの進行は困難が予想される。状況を見ながら、2020 年度は関係継続の方法を探り、2021 年度につなぐ。

・2019 年度末に予定していた視察（児童福祉領域やまちの居場所づくりの先進事例調査）について、新型コロナ感染症による影響で実施できなかったため、移動可能な状況になれば 2020 年度に行う。

２．目標達成状況について（①～④のいずれかを選択してください）

① 達成した　②おおむね達成した　③十分達成されたとはいえない　④未達成である

※上記の目標達成状況を示す事由を記載のこと。「十分達成されたとはいえない」「未達成である」とした場合は、改善点を記載。（計画の見直しが必要な場合はその内容も記載すること）

・年度計画として予定していた日野市との連携による地域の居場所の基礎調査については、おおむねその動向を把握することができた。また、居場所づくりとしての活用が期待される日野市内「地区センター」全箇所の立地状況および活用状況を把握し、貴重な基礎資料を社会に提供することができた。居場所拠点となる日野市中央公民館、日野市カワセミハウスなどとも良好な関係を築いた。

・都市農村交流の推進による居場所づくりに関しては、これまでの大学と現地の農村との生活交流活動の取り

組みに、日野市民有志も一緒に入っていただき、考え方を共有する機会を持ちながら、基礎的な関係づくりを行い、今後の活動に向けての礎を作ることができた。
・地域の子どもの居場所づくりに関する活動については、新型コロナウィルス感染拡大に伴う活動自粛が２月中頃から一斉に広がった影響により、予定していた活動が一部行えず、未達成な部分も含むことになった。

取り組み状況について

１．組織的な取り組みができているか（①～④のいずれかを選択してください）
①できている　②おおむねできている　③あまりできていない　④できていない

※上記を示す事由を記載のこと。「あまりできていない」「できていない」とした場合は、改善点を記載。

研究プロジェクトメンバーとは、必要に応じて意見交換を行い、各活動の進捗状況について共有している。また、日野市関係者を招いての研究会、意見交換会にも、メンバー全員で参加し問題意識の共有を行っている。「居場所づくり」という共通のテーマのもと、研究員の各専門を活かして新しい知見の発見につなぐという意識が共有されている。

２．研究所メンバーの活動状況について

※分担された役割を含めた活動状況をメンバーごとに記載してください。

教員氏名	活 動 内 容
須賀　由紀子	日野市地域協働課、高齢福祉課、都市計画課、日野市カワセミハウス、日野市中央公民館、日野市地域包括支援センターなど、市民に寄り添う地域コミュニティづくりの施策を担う日野市の関係各部署との協議や情報交換を行い、各構成員の実践・調査研究が円滑に進むよう、プロジェクト全体の進行統轄を行っている。また、都市農村交流の促進の中で、広域で地域と地域が支え合う場のモデルづくりとして、新潟県十日町市布川地区と日野市関係者との関係づくり、その中に、学生を参加させて問題意識を高めていくための活動の推進を行った。
橘　弘志	担当領域は「まちの居場所」モデル開発のための空間づくり、リノベーション関係の研究 ・日野市の地域の居場所資源として、日野市地域協働課と共同し、市内「地区センター」66 箇所の全ての実地調査を行うとともに、その成果をもとに、地域資源活用のための「地区センター図鑑」の作成を行った。 ・日本建築学会「まちの居場所」研究 WG 主催の研究会に参加し、「まちの居場所」に関する研究および実践について、最新の動向について協議および情報交換を行い、実際に街中で「居場所づくり」を行っている実践者との関係づくりを行った。
井口　眞美	担当領域は、保育・造形活動の推進による「まちの居場所」モデル開発のためのソフトプログラムの研究と実践、調査

	・南平地区の活動において、学生に対し造形活動の内容面や実施面でのアドバイスを行ってきた。また、今後の進め方に関しては、学生と主催者側の話し合いに同席する等、学生による実践を支援してきた。
大澤　朋子	担当領域は、児童福祉の観点からの「まちの居場所」モデル開発のためのソフトプログラムの研究と実践、調査 ・南平地区の活動に継続参加してきたが、キャンパスからの距離や活動時間の制限から参加できる学生が限られているため、保育・教育・子育て支援を学ぶすべての学生が在学中に１回以上参加できる活動の創出を計画していた。次年度６月より開始予定であるが、状況は流動的である。

成果について

１．波及効果が見込まれる成果が得られているか

※上記の状況を示す事由を記載のこと。（波及効果については、主に事業終了後の発展を問うものであるため、設置申請書で示した波及効果および教育又は社会に還元するために得られる知見に対し、現在の見込みを記載してください。申請時との差異がある場合も、その旨記載してください。）

・日野市の地区センターについての調査をまとめた『地区センター図鑑』は、建築とまちづくりへの問題意識をテーマに持つ学生ならではの学修を活かし、地域づくりに必要な地域資源がまとめられた作品であり、域学連携の成果である。日野市担当部署からその波及効果への期待が大きく寄せられている。単に資料集の図鑑（モノ）を作ったということではなく、ここに収められた情報が、新たなコトや場を生み出していくことが期待される。本図鑑を作成できたことは、すでに大きな成果である。

・都市農村交流を推進するツールとしてのリーフレットについても、地域自立社会づくりについて学ぶ学生の目線で編集され、都市と農村を結ぶ関係人口づくりに資するものがすでにできている。

・今後、これらを活用しての活動展開が期待できる。

２．雑誌、学会発表、図書など

・『女子大生が全部回った　地区センター図鑑』（2020.3）
・『児童の放課後支援活動に参加した学生の育ち―日野市M地区での「子供の居場所を作る会」の活動から―』，井口眞美，日本幼児教育学会誌第 25 号，2020 年 6 月刊行予定（校了）
・日本建築学会編『まちの居場所　ささえる／まもる／そだてる／つなぐ』鹿島出版会、2019

※各項目の枠は必要に応じて広げてください。